

「ニフォン」が「日本」になる時



巽 孝之

この6月末、アメリカ東海岸はマサチューセッツ州ニュー・ベッドフォードで行われたメルヴィル協会の第5回国際会議「フレデリック・ダグラスとハーマン・メルヴィル150周年記念祭」に出席した。黒人逃亡奴隷として出発したダグラスと巨大なマッコウクジラへの復讐物語『白鯨』を書いたアメリカ・ロマン派作家メルヴィルとを比較検討する趣旨の集まりで、ダグラスの自伝『わが捕縛、わが自由』（1855年）を再演するパフォーマンスやメルヴィルが船上の奴隷反乱を扱った傑作中篇「ベニト・セレノ」（1855年）のオペラ版も上演され、わたしは大いに楽しんだ。

ニュー・ベッドフォードといえ、19世紀にはアメリカ捕鯨のメッカとして栄華をきわめた都市である。だが21世紀を迎えた今日では、見る影もない。この町を最初に訪れたのは2001年だが、足を踏み入れるたびに、ここはゴーストタウンではないかという印象を新たにす。何しろ空港はないし、ボストンからクルマに乗るかバスに乗るかしなければならず、まともなホテルひとつ存在しないのだ。毎年1月に『『白鯨』マラソン』、すなわちかのメルヴィルの巨編をメルヴィル愛好家たちが1章ずつ朗読していくイベントが行われ、時折、今回のようにこの町ゆかりの作家メルヴィルをめぐる会議が開かれる時以外は、たぶん死んだように静まりかえっているだろう。会議の中心舞台は捕鯨博物館だったが、シンポジウムの最中にも、潮騒とカモメの啼き声が、必ずしも安普請ではないはずのホール内部にまで、響き渡る。このあまりにものどかなサウンドスケープほどに、とうに鯨油文明が用済みとなり石油文明が繁栄を誇る21世紀現在を実感させる装置はない。だからこそ、かえってわたしは、19世紀半

ばにはまさにこの捕鯨都市から多くの捕鯨船が繰り出し、遠く太平洋の彼方に巨大な「日本漁場」を抱えるわが国を捕鯨基地にすべく奮闘したことを、その結果、黒船による開国が成ったことを、思い返したものだ。

ところで、当時の日本はアメリカ人にはどう映っていたか。メルヴィルの『白鯨』では、白鯨(Moby-Dick)にエイハブ船長が片脚を食いちぎられるのも日本沖で、第109章「船室のエイハブとスターバック」の第2段落においてエイハブ船長が広げる海図にも、日本諸島の長大な東の沿岸が含まれる。それらの島々は具体的には“Niphon, Matsmai, and Shikoke”と記述されている。鎖国日本については絶対的情報量が少なかったから、「ニフォン」「マツマイ」「シコケ(シコク?)」と読める奇妙な綴りについては問うまい。ここで肝心なのは、1841年にアメリカの捕鯨船が四国は土佐出身の中浜(ジョン)万次郎を救助しており、1848年にはアメリカ原住民はチヌーク族の血を引く鯨捕りラナウド・マクドナルドが単身、捕鯨ボートで日本海の鯨を求めるも自ら鎖国日本に捕獲され、宗谷や「松前」を経て長崎へ送られたあげく、日本における事実上最初の英語教師となっただけである。現代文学を代表するアメリカ原住民作家ジェラルド・ヴィゼナーもそのことを痛烈に意識したうえで、2003年には自身の民族と日本人とを鮮やかに類推する『ヒロシマ・プギ』なる傑作小説をものした。メルヴィルの記した地名群は、当時に見れば捕鯨ネットワークを読み解くための記号だったかもしれないが、150年後のいまから見ると、開国日本の起源を紐解くために不可欠な暗号なのである。

(たつみ たかゆき・慶應義塾大学文学部教授)

「活用問題集」を用いた初期指導

——『ジーニアス英和辞典 第3版』を使って



橋本敏郎

■はじめに

本校では、辞書や参考書などの選定はその学年の担任2名が中心となって行っているが、私が担任であった今年の卒業生から現2年生までの3年間、『ジーニアス英和辞典第3版』(G3)を使用してきた。「辞書指導」も各学年に任されているが、1年生の初期にG3の『活用問題集』を使用するなどして使い方を指導している。現在、1年生の担任をしているので、今回は3年前のことと現在のことを混ぜながら書くことになる。また誰もが行っていることで参考になることは少ないと思うが、ご了承願いたい。

■辞書指導の実際

3年前の冬、新入生をどう指導するかをもう1人の担任予定者(英語)と話し合っている時、「最近辞書を引く経験もなく入学してくる生徒が多い」という噂を耳にしていた。ここに生徒に対するアンケートの結果(当時私たちが不定期で発行していた「英語便り」に掲載したもの)があるが、中学時代に辞書を引かなかった生徒は26%もあり、辞書を持っていなかった者も13%いた。新出単語をどのように調べたかを聞くと、29%が「教科書の後ろで調べた」と答えている。辞書がうまく使えないと、予習はもちろんのこと自学自習も効率的にできない。そこで辞書に強制的に触れさせるため辞書指導をしようということになった。しかし、3年間の進捗等を考えると辞書指導に時間をかけることは難しかったので、考えた結果、次の2つを行うことになった。

・「朝学習」の活用

本校では、^{ショートホームルーム}SHR前の10分間、「朝学習」を行っている。1年次は英国数で2年次後半からは理社も入り、やり方は係の生徒が問題を配付し、解答後自己採点をしてSHR時に担任が回収するという方法で行っている。私たちはこの時間に『活用問題集』を用いることにした。

この『活用問題集』は9課から成っており、1回1課で進めば5月中旬の考査前には終わるだろうと考えていた。しかし、予想は甘すぎた。

第1課は、A「単語を辞書の順に並べる」、B「派生語調べ」、C「熟語調べ」から成っている。回収したものをざっと見ると、大部分がBの途中で終わっていた。朝学習の時間に職員は朝会をしているので生徒たちの取り組みの様子は分からなかったが、入学直後ということから判断すれば、一生懸命取り組んだと思われる。そのときにきちんと検証、指導すればよかったが、結局「問題集」をそのまま配布するのではなく、頑張れば10分で取り組める量に調整をして印刷することにした。

3年前は生徒の取り組み方を見なかったもので、今回本稿を書くにあたって、現1年生に同じものをやらせてみた(時期：9月初め、辞書：他社のもの)。まずA～Zを書き出すところでは、アルファベットをブツブツと唱える声やABCの歌が聞こえた。おそらく普段でも頭の中で歌っているのだろう。練習問題Aにも時間がかかっていて、特に4番(telephone / telescope / telepathy / telegraph)に時間をかけているようだった(間違えた生徒もいた)。次にBでは「見出し語って



何？」と数人に聞かれ、解説の必要性を感じた。これが4月の第1週であったとすると、まじめに取り組んでも10分間で半分もできないのは当然である。改善点としては、①最低でも1回目は授業中に行い質問を受ける、②プリントに手書きで「見出し語とは」などの解説を加える、③返却時に解説を行うなどが考えられる。やらせっぱなしではなく、もう少し丁寧に指導する必要があった。

・「辞書引き月間」

短い時間であっても何らかの指導をということで、4月を「辞書引き月間」とし、英語Iで1時間に最低1回は全員で辞書を引く活動をしようということになった。

まず、単語の意味を確認するとき、反意語や派生語なども確認した。初期の頃はそこまで予習している生徒も少なかったのが、全員で調べることが多かった。例えば“*They are not very clean.*”の文では*clean*の項を引かせ、*dirty*という語を見つけさせた。また初期段階では、新出単語を調べるときにコンテキストを考えて調べる生徒は少なく、大部分が最初に出ている意味を書き出している。そこで前後関係などから意味を考えさせるためにも辞書を活用した。例えば*serious*。“*These problems are very serious.*”という文であるのに「生まじめな」と答える。そこで辞書で「人」の場合と「事態や病気」の場合では異なるということを確認し、最初だけを見るのではなく、説明や例文と照らし合わせて引く必要があるということを伝えた。

熟語を確認するときも辞書を一緒に引いた。“*take part in*”の同意表現を知るために引かせると、当然であるかのように*take*を調べ始める。4ページもあるのだから必ずあると疑わず真剣に探す。数人が辞書の真ん中あたりを引き初めた頃に、「そろそろ*take*はあきらめろよ」と言うと一緒に*part*を探し、“*participate in*”を見つけていた。辞書を引くには「勘と経験」も必要であることを告げ、私たちでも一発で見つけられない

ことがあるという話でほっとしたようだった。

*track*が出てきた時には、*track*の項で*truck*との違いを確認させた。また文型の確認にも活用した。第5文型の*make*が出てきたときには、辞書で第3・4文型を確認するとともに第5文型の補語にはどんな品詞がくるかも一緒に確認した。

辞書引き活動には生徒も一生懸命に取り組んでいたし、眠気防止にも役立っていたようである。そして一緒に辞書を引くことによって、少しずつではあるがどこにどのような情報が載っているかを説明することができ、その後の自学に役立ったのではないかと思われる。改善点としては、やはりきちんとした計画が必要であることはもちろん、朝学習で行った『活用問題集』と関連づけた指導をすることが有効であろう。また、「予習プリント」(考查作成者が作成していた)にこちらが意図した辞書引きができるような項目を設けることも1つの方法だと考える。

■おわりに

最近の学習辞書は、電子辞書も含め生徒の必要としている情報や機能が充実していて「参考書」としても活用ができる。しかし、どのような情報が載っていて、どう見ればいいのか分からないければ、生徒が持ち運びを嫌がるただの「重い」本である。初期段階では基本的な使い方を集中して指導し、それには『活用問題集』の使用が有効である。しかし、辞書を「参考書」として有効に使えるようになるために2、3年次における辞書指導も考えなければならないと思う。

最後に生徒の切なる願いを紹介し、締めとした。理想の辞書とは？ 軽いもの、もっと例文の多いもの、めくりやすいもの、引くのに時間のかからないもの、声に出すだけで調べられるもの、本文に合った意味が出てくるもの、文を入力すると意味や単語、文型の説明をしてくれるもの、そして、一度引いたらすぐに頭に入るもの。

(はしもと としろう・新潟県立新潟南高等学校教諭)

積極的に辞書を引く姿勢の育成を目指して

——『ジーニアス英和辞典 第3版』を使った入門期指導



芳賀修栄

1. Which type of dictionary to choose?

本年度山形西高校では、『ジーニアス英和辞典 第3版』を含む2冊の英和辞典と和英辞典1冊を新入生に推薦した。大学進学希望者がほとんどであるため、受験用として、より使いやすいものを、英語科教員の合議により複数選んでいる。

しかし、自ら使う方法を教えないと、高校での英語学習に対処できない。そこで初期指導で重視することは、「辞書を積極的に使おうとする姿勢」を育成することとなる。

2. Just for looking up the word or expression?

2.1 Situation and problem

「/ /で囲まれたヘンな文字は何?」「って何の意味?」「意味がたくさん書いてあるのでどれを選べばいいのか分からない」などが、高校での最初の授業で実際に辞書を使った時点での代表的な質問だ。

初期の辞書指導を集中的に行うのは4月の1回だけだが、その後も、レッスン終了後の10~20分、あるいは講習時の10分など、少しずつどこかで時間を見つけて、語彙を指定しての検索などを行わせている。幸い、本校は英語が好きな生徒が多いので、指導によく従ってくれており、2学期を迎えた現在では、辞書を引く速度も随分向上したと感じている。

しかし「習うより慣れよ」だけでは無理があり、「自然に使い方に慣れていく」初期指導も必要だと感じている。

2.2 Solution

辞書指導のひとつとして、調べて知って面白そうな語句を時折授業で調べさせている。1年生の1学期における授業での活動例を以下に述べる。単語を調べて終わりではなく、気分転換も兼ねた自己表現活動を含んでいる。

●活動例と手順：その1

①bで始まる4文字の単語を調べさせ、baby, back, bake, bank, baseなど、生徒が調べた単語をいくつか板書する。

②辞書でbarkを調べるように指示する。『ジーニアス』では例文としてHis bark is worse than his bite. (彼は口やかましいが本心は悪くない)が載っている。これにYour English teacher's bark is worse than his bite, so don't worry. (=What he says sounds much worse than what he'll do.)を追加して、教科担任の自己紹介にした。

③調べた4文字単語の辞書の例文を利用して、自分の日常生活を説明する英文を書かせる。生徒作の英文例は、I have a bath every day./I had a bath last night./I was born in 1989 in Yamagata./ My father beat me at shogi. などである。(下線は調べた単語)

3. Only to be able to use what you look up?

3.1 Focus a bit on form

調べた英語を、受験用の知識としても、コミュニケーションの道具としても、役立てることがで



きる辞書指導はないだろうか？

そこで初期指導だからこそ扱える基本語彙を利用することを考えた。たとえば open。

●活動例と手順：その2

①辞書は使わず，リスニングから始める。

Close your eyes and use your imagination. OK, now let's open an imaginary door. Don't open your eyes, just imagine. Now there's a bookstore in front of you. But it won't open until ten o'clock. Oh, look. Here comes a man. He opens the door with the key. He says to me, "The store opens at ten." ... Now open your eyes. And open your dictionary to page 1312 and 1313. You can find the word 'open' here.

②上の下線部を含む英文プリントを渡し，それぞれの意味が open の項目のどこにあるかを辞書で探させる。

③上記の英語を発音練習し，音節，反対語，活用形，SVO などについても，時間に余裕があれば説明する。意味の認識に加えて文型面にも言及したいのが本音であり，自動詞や他動詞についても触れ，これからの文法，構文学習への下地としたいという意図でもある。

open を辞書で調べる機会は，高校英語では少ないだろう。だからこそ初期の段階でそれを実行してみる。open の他にも eat, enjoy, finish, mind などの語で行うこともある。

●活動例と手順：その3

強引に辞書を引かせる活動に，1つだけ異なるものを選ぶ「Odd One Out」を用意している。生徒はまず odd を調べざるを得ない。続けて板書またはプリントで high, warm, lucky, famous などの語を提示し，答えを1つ選ぶように指示する。この活動では，() の後にある表示 (-er 型) に気づかせるのを狙いとしている。

3.2 Variation

初期の辞書指導では，教室英語にも触れている。英文読解において，内容確認の Q&A を行う際に使うフレーズの中に，「答えはそれで（そこ

を見て) すぐ分かる」がある。There is a hint in there. だけでなく There is a hint, I think it's a giveaway. と言うこともあるので，giveaway を調べる機会を作っている。is を強調して発音練習をしたり，辞書で given にも目を移させて，given name のいくつかに言及することもある。このようなことが，名前の多様さを知る機会になればと思つてのことだ。

「これからこんなに辞書を引かなければならないの？」と恐れを感じ始め，辞書の細かな文字に目が疲れた新入生に，giveaway, given と同じページにある glad を見るように指示して，辞書指導を終えることもある。「Am I ever glad it's over. が今のみんなの気持ちだよ」と言つて，この英文を数回発音練習してから，辞書にある glad の例文を読むように指示する。

4. Can using dictionaries be an enjoyable 'activity'?

辞書指導で重視していることは，「また辞書を使ってみよう」，「やっぱり辞書を使う必要があるんだ」と生徒が思うようにすることだ。「辞書で調べてみると面白いことが書いてある」と実感すれば，自ら語彙を辞書で調べる姿勢に結びつくはずだ。

私は電子辞書の『ジーニアス英和辞典』も併用しているが，その便利さゆえに，今では手放せない道具となった。「あんな小さい画面ではだめ，紙製の辞書でないと勉強にならない」という意見と，携帯電話の画面がごく当たり前であり，「電子辞書の画面，じゅうぶん大きいよ」という若い世代の間にギャップがあることも感じている。i モードのジーニアスなら，彼らにとって何の違和感も無いのかもしれない，と思つたりもする。

生徒にとって，辞書を使う楽しみは始まったばかり。It looks like the fun is just beginning! であることを常に心に留めておきたいものだ。

(はが しゅうえい・山形県立山形西高等学校教諭)

語の全体像をつかませ、応用力を高める指導

——『プラクティカル ジーニアス英和辞典』を使って



佐藤 哉二

生徒が辞書を引く目的は何か。考えるまでもなく、それは「単語の意味を知るため」であろう。

その証拠に電子辞書をもつ生徒が急増しているようである。単語の意味を調べるといふか「知る」には、電子辞書ほど手軽で便利なものはない。

電子辞書の功罪はあちこちで研究され始めているので、本稿では「紙の辞典」「書籍版」の『プラクティカル ジーニアス英和辞典』を用いた辞書指導の例を述べてみたい。

■本義・原義を読ませる

紙の辞典でもやはり単語の意味を知るために生徒は辞典を引く。その時の指導として重視したいことがいくつかある。

まず1つとして、第1の語義に飛びつく生徒に、見出し語に続く発音の次にある「本義」あるいは「原義」を読ませたい。本義・原義はその語の全体像をつかむための打ち出の小槌とも言うべきものだからである。例を見てみよう。

rise/ráiz/【「下から上へ動く」→「発生する」】

具体的な目に見える〈人・物〉が立ち上がり、上昇する。目に見えない〈価格・地位〉などが上がる、高くなる。さらに〈感情・涙〉などが湧き上がる。

このようなイメージをしっかりと生徒が理解できれば、

The aircraft rose slowly into the air.

では rise と fly の違いまでイメージできよう。

Duncan felt the hairs rise on the back of his neck. では、たとえ辞書に「〈髪の毛が〉逆立つ」の語義がなくても、あのぞーっとする感じを追体験して理解できるに違いない。

そして実際に髪の毛が動くわけではないのに rise が使えるのを知ることになる。これが理解できれば、

His anger rose at her insult.

(彼女の侮辱で彼の怒りがつものった)

A big rock rose out of the sea.

(大きな岩が1つ海面から突き出していた)

The road rises steeply from the village.

(道は村から急に上り坂になっている)

などの状態や心理的な起伏の表現にも使えることが分かる。

■多義語のグループ分けを利用する

先に本義・原義はその語の全体像をつかむための「打ち出の小槌」だと喩えたが、その打ち出の小槌から振り出されるのが、重要度の高い A, B ランクの多義語に採用されているローマ数字 I, II, III のグループ分けされた語義である。

これもその語の全体像を壊すことなく、語義と語義の際立ちを知らせている。

rise

I [数量・程度が増加する]

II [上がる]

III [立ち上がる]

IV [発生する]

rise は「有形無形のものが下から上方へ立ち上



がっていく」というのが全体的イメージなのだ、と I, II, III でつかんだら、個々の具体的例へ誘導したい。

「上がる」「立ち上がる」など主語があれこれ多岐にわたるグループでは、具体的にそれぞれの語義区分に主語がくゝで示されている。たとえば III [立ち上がる] には〈人などが〉〈議会・法廷などが〉などがあるので、生徒はさらに具体的に rise の使用範囲を知ることができる。

make のように主要語義「作る」だけでは全体イメージをカバーできない語の場合も、この大グループ分けとその区分内の選択制限と具体的語義が役に立つ。

このように、教科書や授業で出てくる単語とは切り離して、毎時間 5 分程度でよいから Word of the Day を指定して、その語の全体的イメージを説明し、生徒に意味の総合的な理解をさせることもできるという一例である。

重要語の * 印をつけてある A ランクの語は約 1100 語あるが、そのうちの語義区分の多い、いわゆる多義語だけでもとりあえず、始めてみてはいかがであろうか。

■辞書指導はいつ終わるのか

「辞書指導」という言い方から、単語の引き方や知りたい文章に類似する用例の発見の仕方を教えることが主となるのは当然であろうが、さらに語法注記、文化情報など、さまざまな種類の情報が満載されていることを知らせるのも指導の 1 つである。だが辞書指導は生徒が卒業するまで続けることはできないし、その必要もない。とすると辞書指導は、何をもちて任務完了となるのだろうか。

導入時の「辞典の使い方」に関しては、アルファベット順から始まり、文型、連語関係の調べ方なども対象となる。これには『プラクティカルジーニアス英和辞典』準拠の『活用ワークブック』も用意されているので編集部へ問い合わせれ

ばよい。

さて、生徒が自分で辞書を引くためのスキルを教えると辞書指導は終わるのであるだろうか。

確かに前掲の『活用ワークブック』を終えると、たとえば、I'm looking forward to hear from you soon. が文法的に正しいかどうか。「外国人は日本人に比べて鼻が高い」の「高い」に high が使えるかどうか。これらを生徒がひとりで調べ、答えを得ることができるようになる。それで入門期の辞書指導は任務完了となる。

■用例でコンテキスト設定ゲームを

辞典の用例はスペースが限られているために、コンテキストから切り離されている。たとえば want ㊦ 1 に次の用例がある。

The plant died from want of water. (その植物は水をやらなかったので枯れてしまった)
want の不可算名詞の例なのだが、コンテキスト次第で聞き手を責めていることにもなることに機を見て触れてみる。

リーディング指導では文脈があるので、Big deal! (そりゃたいしたもんだ) が文字通りの意味なのか、反語的に使われているのかが分かる。

The boss measured me by my academic background. (上司は私を学歴で判断した) も、この文がどういう場面で発話され、何を言いたいかを生徒に尋ねてみる。

普通の意味の「辞書の引き方」からは少々逸脱した指導かもしれないが、辞書が引けるということに、その文章の発話された意味・意図を理解することまでをも含めるなら、文法指導から一步踏み出した、しかも言葉の理解の大切な協道に入る辞書指導もあってよいのではないだろうか。

言葉は伝達的手段である。その目的が達成できるようになったときが、本当の任務完了かもしれない。

(さとう さいじ・元埼玉県立高等学校教諭)

「読む」ことに重点を置いた辞書指導

——『ジーニアス英和辞典 第3版』を使って



堀内秀俊

1. 辞書指導の段階的動機づけ

辞書指導の第一段階は、新出語義の検索指導である。高校入学後、初めて辞書を手にする生徒もいて、まずは新出単語の意味を探ることから辞書指導を始めることになる。

第二段階には、習熟度にもよるが、生徒の学力のばらつきがある中で、既習範囲の知識から、1つの語における多義性や単語の持つ文法性へのアプローチなどを理解させるための指導を行う。

2. 辞書指導による語法問題演習の奏功事例

2.1 辞書を用いた語法指導

辞書指導を通して導入する文法事項の1つとして、形容詞の叙述用法と限定用法を考えてみる。

到達目標は、以下のような語法問題の解法を辞書指導を通して見出し、ターゲットの理解を定着させることである。辞書を読むことで語法問題の解答を発見し、その理解を深めさせるのである。

- (1) Don't wake up the () dog.
① asleep ② sleep ③ sleeping ④ slept
- (2) The baby is sound ().
① asleep ② sleep ③ sleeping ④ slept
- (3) He is one of the greatest () musicians.
① asleep ② alive ③ awake ④ living

(1)は限定用法、(2)は叙述用法を伴う基本的な問題、(3)は大学入試などに頻出する応用問題である。

中学校の既習範囲である形容詞は、高校英語においては限定用法と叙述用法についてより明確にし、定着させることが課題である。すべての形容

詞を両用法で用いることができると勘違いしていることもあり、用法とともに形容詞が個別に持つ特性も辞書指導でしっかりと押さえない部分である。

高校でも既習したことを踏まえて、その復習として形容詞の2つの用法を問うと、ほぼ用法名は解答できる。次に、念のため、それぞれの用法の用例で何用法かを聞いたり、形容詞の修飾関係などについても確認する。ここで一区切りである。

2.2 問題解法へのアプローチ

とは言っても、用法の名称を覚えているということと実際の英語における形容詞の運用を理解できているかということは別問題である。そこで、実際の問題演習によって定着を図る。習熟度により、(1)は例題として扱う場合と生徒に自力で解答させる場合があるが、ここでは例題として扱う。

この問題では、名詞の前置修飾として分詞形容詞の生起可能性があることに気づけるかどうかか鍵である。ここで、形容詞の用法の問題と説明して(1)の例題を提示しても、似たような綴りの選択肢に戸惑う生徒も多い。形容詞の用法の名称は答えられても、実際に英語の中でどのように形容詞が運用されているか、理解が定着していないためである。ヒントとして、どのような状態の犬を起こしてはいけないのかを考えさせ、形容詞の生起可能性を示唆する。選択肢②は品詞的に不可、選択肢④は分詞形容詞としては生起可能性があるが、意味的機能として不可である。ここからが、辞書指導の腕の見せどころとなる。



2.3 辞書の中に解答を見つける

実際、ここで残された2つの形容詞のように、表面的にも意味的にも類似した語群からの選択では、生徒は戸惑うことが多い。最終的に語群選択をさせる際には、何らかの決定的根拠が必要である。(1)においても、最終的に形容詞が生起することが何とか理解できたとしても、残る選択肢の二者択一にまだ迷うこともある。結局のところ決定的要因は、どちらの形容詞が限定的に用いることができるかである。辞書を調べる際に、語義だけに目が行き、辞書の記述をよく読まない、せっかく解決の糸口が辞書に書かれているにもかかわらず、その重要な記述を見落とすことになる。

sleeping を調べさせると、

形 [限定][後にくる名詞に強勢を置いて] 眠っている、…《◆(1) 叙式的には asleep. …》

とあり、asleep を調べさせると、

形 (φ比較)[叙述] 1 眠っている(↔awake); …

とある。ここで語義だけでなく語法記述にも着目させると asleep は叙述用法なので不可であり、よって解答は限定用法の③となることが分かる。辞書をよく読めば問題の解答が見つかるのである。

2.4 さらに辞書をよく読む

同様に(2)でも反復させる。(2)は(1)の延長線上にあり、解答は叙述用法の①である。根拠は(1)に準ずる。が、ここで一難去ってまた一難である。(2)でつまづくのは、sound である。sound はどうしても名詞や動詞としての既習度が高いため、副詞の sound の用例に生徒は初めびっくりしてしまう。sound の意味を質問しても、生徒が慣れないうちは「音」や「音がする」という答えが多い。

ここで形容詞が叙式的に用いられていることが理解できたので、今度は形容詞に前置され得る要素が何か、すなわち形容詞を修飾し得る品詞が何かを考えさせる。品詞として副詞が思い浮かんで

も、やはり副詞という -ly 形という先入観が強いせい、なかなか sound が副詞というイメージが定着しないようである。

そこでまた sound を調べさせると、

副 [通例 ~ asleep] ぐっすり、十分に (soundly)
 〓 He fell ~ asleep. 彼はぐっすり眠り込んだ。

とある。ここには直接的な解答とも言える、語法記述や用例までもが示されている。

これが、高校英語らしい、既習範囲の知識から一歩進んだ語の多義性や、単語の持つ文法性へのアプローチのための辞書指導である。

そして仕上げに(3)である。(3)は実は非常に単純な問題で、限定的に形容詞が生起するので、解答は限定用法の④である。解答は1つしかないことを理解させる。

3. 読むことに重点を置いた辞書指導

(3)の問題では、習熟度が進んでくると次のような質問が出ることもある。「alive は限定的にも使われるから、問題の解答が違うのでは」。「確かにその通り、よく勉強していますね」とほめてあげたくなるが、(3)では alive が限定的に用いられる場合の語義では不自然になることから、やはり解答は④しかないのである。

alive を調べてみると次のように記されている。

形 [叙述] … 2 <人・記憶などが> 生き生きして… 〓
 She was [looked] still very much ~ for her age.
 … **語法** この意では限定用法に用いることもある。
 通例修飾語を伴う: She is a really ~ student.

辞書指導では、特にこのように「読む」ことに重点を置きたい。語義を引くだけでは、本当にその語を理解したことにはならないのである。

既習知識が広がること、英語の実際の運用の語感がかめること、個々の単語が持つ特性を体系的に捉えることができるなど、辞書をよく「読む」ことで英語の深い理解ができるのである。

(ほりうち ひでとし・Royal Academy 教諭)

自立に向けて「前へ！」

——『ベーシック ジーニアス英和辞典』を使っての指導



中畝 繁

■はじめに

この世はとかく諸事争論だ。意見・信念は激突し、結果相反する形が共存する。生徒（児童）が第二言語として英語をある程度修めようとする場合も、様々な点で指導者間に意見の相違が現れる。辞書を例にとれば、「できるだけ引かせるほうがよい」から「すぐに引かせないで文脈から類推させてから引かせたほうがよい」、また「辞書を捨てれば英語が読める」までの幅がある。

かくいう私は、生徒が引く引かない以前のことを問題にしている。「引けるようになる」である。指導者としての立場としては「引けるようにさせる」だ。そして辞書を使いこなせるようになっておくことは、学習者として“学校後”に自立できる技術の獲得だと信じている。

■ニーズに合わせる

勤務校は商業高校で、進路に関しては、進学が4割、就職が6割ほどだ。それゆえ全員に対して大学受験をとりあえずの英語学習目標・目的にはできない。次の上級学校にあがる生徒と違い、多数派である就職する生徒にとって高校の3年間は最後の必修ステージとなるからだ。そこで、全員に身につけてもらいたいことが2つになる。英語の基礎力と継続を下支えする学習技術である。

語学の肝である継続学習を学校後も成立させるようにという観点から、「辞書を使いこなす」を大事な習得事項と位置づけている。初心者指導では対象全員が同一の辞書を教室で使うというのが一番便利で楽なのだが、環境上そこまで強気には

押せない。そこで、入学前に英和辞典を持っていない新入生に対して「英語科からのお願い」として辞書を整備することを推奨している。

現年度は紙の英和として『ベーシック ジーニアス英和』(BG)、電子辞書としてセイコーインスツル製のSR-H4500か同SR-V4700(音声付き)を英語科として推薦した。この三者の共通点はBGである。新入生の大半は中学で英和辞典を使ったことがないので、BGが身の丈にあった入門英和として手頃だという判断から推薦している。幸い4500と4700には『ジーニアス英和 第3版』、英英としてOALD6も入っているので学習者の進化にも1筐体で長期に対応できる。

■どんなふうに指導するか？

新入生に対してはこんなふうに接している。

時期としては、①1学期最初の時点、②1学期期末試験後、③2学期初め。伝授する技能は各段階に合わせて順にグレードを上げていく。

①主に見出し語を見つける練習と、原形と変化形の区別、品詞、C/U, ㊦/㊧、形容詞の限定・叙述用法を示す[名詞の前で][補語として]等基礎的な知識の理解を、演習を取り混ぜながら行う。これらの事項の学習にはBGの巻末の「文法のとびき」を使う。また、英語の語順と日本語との関係を視覚化した次頁に示す「㊦と㊧の関係」などは能格動詞の姿を透視図のように見せてくれる。

②短めの投げ込み文章の和訳を課す。またイディオム・成句か否かの見極めと、それらの語群の中で、どの語を辞書であたれば探せるか。



④と⑤の関係			
④	1	open A	A を開く
⑤	1	A open	A が開く
④	5	open A	A を始める
⑤	4	A open	A が始まる

③教科書の単元の本文の内容を自力で解読する(自宅での予習のシミュレーション)。

見出し語に行き着く演習の場合は、当然だが電子辞書の生徒が圧倒的に速い。だが既述の予習シミュレーションの段階では、紙組と電子組に質的な差は出てこない。たぶん中学段階での英語の基礎語彙・文法の定着差と地金の日本語運用力の差の方が作業の質と量に影響するということなのだろう。ところで、どんなところで初心者はずまずくのだろうか。形の違い、語順による語の役割の違いが分かりにくい生徒が多い。端的にいうと、文法力が足りないということでもある。

例：Wetlands clean water and stop flooding.

教科書の欄外には「flooding 洪水」とある。英和で and 以外を確認する生徒が多い。結果は、「wetlands 湿地」「clean きれいな」「water 水」「stop 止める」。これを加算して出来上がる日本語は「湿地のきれいな水と[で]洪水を止める」のようになる。この結果は紙・電子の違いにはもちろん由来しない。共通している誤認は、出会った最初の語義を吟味もせずに、そのまま採用してしまうことだ。この場合なら主語と述語動詞の存在を見切ることが求められるが、現実にはこの関係性がピンとこない生徒が多い。さらに、実はもう1つ大事な点がある。それは日本語力だ。出来上がった日本語がいびつだと感じる生徒は、机の間を回っている私を捕まえて「先生、これ変じゃない?」と聞いてくる。その場合は、“OK, I'll give you a hint. The wetlands CLEAN water. You CLEAN your room, right? A wetland CLEANS water.”のように振り込む。聞き取れなければ、「あのね、もしも A wetland

だったら、cleans になるんだぜ」とスイッチする。すると「じゃ、これ動詞?」と響いてくれるときもある。新たな発見へ誘導できたときは教えていて楽しい瞬間だ。

例：Do all the people speak only Japanese? Do only Japanese live in your country?

ここで生徒にとって困難な点は3つある。まず連続する文の中で2度出現する名詞 Japanese の意味が異なること。ただし、speak と live の意味を確認していくと常識で判別できるので、まあ小さな困難点ではある。やっかいなのは、実は only のほうだ。英和の形容詞の語義「唯一の、たった1つの、ただ…だけの」から、意味を紡ぎ出せるかということだ。そして最大の困難は、辞書に出ていない文脈上の意味が探り当てられるかということだ。指導上便宜的に語・文・段落とボトムアップしていくのだが、その過程で生徒は文脈上の意味を見落としてしまいがちなのだ。そんなときは Who are all the people? と尋ね、「日本国民は日本語しか話さないのですか。日本には日本人しか住んでいないのですか」のように理解を得ているかどうか確認する。

■おわりに

引くことができるようになったら、ぜひ紙のBGはぱらぱらと眺めたり、読んでもらいたい。また電子の場合は、私家版単語帳作りから入り、和英・英英・国語を英和とリンクさせる技の伝授、内蔵の多読用 Oxford Bookworms (3レベル10小説)への挑戦へと進ませたい。

願わくば、喜々として紙も電子もおもちゃにしている私の姿が、生徒の目に「絶滅危惧日本人“学校後”継続英語学習者の role model」とでも映じていてくれるとうれしいな、と時々がらにもなく弱気に振れる。そんな時は小声でこうつぶやく。「前へ!」

(なかうね しげる・埼玉県立皆野高等学校教諭)

コミュニケーションな授業における 辞書指導



山岡憲史

■高度なコミュニケーションをめざす辞書活用

オーラル・コミュニケーションは、辞書の活用に最も縁遠い英語科科目であろう。英語で「コミュニケーションをしようとする態度」を育成するには、間違いを怖れず、不正確でもとにかく言葉を多く発する fluency を奨励する。一方、語の意味や用法の正確な定義や説明を記した辞書は accuracy の権化であり、コミュニケーション活動で逐一正確な情報を求めているのは、fluency が滞ってしまうからだ。

しかし自信を持って英語を話せるようにさせるためには、正しく良い英語で、コミュニケーション自体をより有意義な情報の授受活動にしていかなければならない。fluency と accuracy を相反する概念であるにとらえるのではなく、より正確で質の高い英語が相手の理解をいっそう促し、意義深いやりとりを可能にし、それを目指すことが同時に fluency をも伸ばすという観点が大切であると思う。この方針を徹底することにより、スピーキング力の養成を通じた総合力の育成が図れる。

■ディベートを通じて正確な表現を学ばせる

ディベートの授業では、fluency と accuracy との双方を同時に伸ばすことを目指し、その際に辞書の「権威」を存分に活用する。

Topic: Should smoking be prohibited in public places?

このテーマで学ばせたい言語材料の1つに「禁止」を表す表現がある。prohibit のほか、forbid と ban も学習させたい。命題の文を forbid と prohibit を使って言い換え、辞書で調べさせる。

Should smoking be forbidden [banned] in public places?

prohibit も含め、すべて〈行為〉を目的語に取ることができるので用法的には OK である。ここで辞書をよく読ませて ban, prohibit, forbid の意味の違いを調べさせる。『ジーニアス英和辞典 第3版』(G3) には次のようにある。

ban	(法的に)禁止する (ban 動)
prohibit	〈法・団体などが〉禁止する 《◆個人が禁止する場合は forbid》 (prohibit 動1)

したがって、公共の場で「禁止する」場合は ban, prohibit がより適当である。

次に人を主語にした場合の使い方を学ばせる。

You should be banned from smoking

You should be forbidden to smoke

You should be prohibited from smoking

さらに forbid の項には (⇔ permit, allow) とあり、これらも併せて使えるように教える。

Smoking should not be permitted [allowed]

You should not be permitted [allowed] to smoke

以上のことを周知させて意見を言わせる。生徒は最初は各語をうまく使い分けることができないが、発言の後、口頭や板書によって訂正をしながら教えると、非常に効果がある。

S: In public places, people should be forbidden from smoking, because there are many people who don't like the smoke.

T: You mean people should be forbidden to smoke in public places because it



bothers non-smokers. Right?

このようなやりとりを繰り返しながら、表現の幅を広げ、より正しい英語への意識づけをする。

■ 発言をもとに better English を学ばせる

辞書はただ語についての意味と用法の記述をするだけではなく、よりよい表現法や使う上での注意事項が随所に示されている。そこで、生徒の不完全な英語の価値を認めてやりながらも、きっかけをとらえて、よりよい表現や正しい使い方を教えてやる。この時にも、辞書の権威が力を発揮してくれる。

T: What's the matter, Rie?

R: I forgot my homework.

T: You mean you forgot to do your homework?

R: No. I did my homework, but my notebook is at home.

T: So you left your notebook at home.

ここで、全員に辞書を引かせて、G3のforgetの「置き忘れる」「持ってくるのを忘れる」という訳語の下の(語法)を読ませる。

語法 具体的な場所を伴う場合はleaveが普通：
I left [×forgot] my umbrella in my car.

生徒や教師が実際に使った英語の適否をその場で確認する作業が、より適切な英語を使えるようにするための大きなインパクトを与える。

私が大好きな記述が次にあるので、ついでに読ませてみる。

語法 [I forget と I forgot] “What was the title of the movie you saw yesterday?” “I forgot [have forgotten].” 《◆忘れて思い出せないときはforgetまたはhave forgotten》 / “Did you shut the window?” “Oh, I forgot.” 《◆忘れていて思い出した場合はforgot》。

なお、新たな「発見」があった時は、必ずラインマーカーで学習歴を残させることを習慣づけると、学習に効果的であるだけでなく、辞書の発する情報を多角的にキャッチできるようになる。

■ function や appropriateness の情報を活用する

たとえば依頼や要請を表す表現を教えてコミュニケーション練習をさせる際、この機能を持ついくつかの表現とともにI wish you would stop talking while I'm speaking. という表現も提示する。

◆ I wish you would ... の形式は依頼・要求・軽い命令などを表し、不満や皮肉の気持が含まれることもある。(G3 wish 働 ③)

I wish ~ が実現の可能性の少ない願望を表すという機能しか知らない生徒たちに、このような用法を知らせ、活動を通して学び取らせる。

T: Say to your partner that you'd like him/her to turn down the radio. Add a reason why you hope so.

S: (To his/her partner) I wish you would turn down the radio. I can't concentrate on reading.

appropriatenessについても、辞書は有益な情報を提供してくれる。

May I have [ask] your name, (please) (↘ [↗]) = Could you tell me your name, (please) (↘ [↗]) 《◆ What's your name? (↘) はきつく響くので避ける; ただし子供に対してはWhat's your name? (↗) とすることがある》(G3 name ①)

G3には何気ないところに、コミュニケーションのための有益な情報がたくさん隠れている。

*

辞書は一見無愛想で無口で、コミュニケーションという「元気っ子」と相容れないように見える。しかし、実はじっくり話しかければ、無数の引き出しからとっておきの秘訣を教えてくれる、人生経験豊かな長老のような存在なのである。しかもその情報は驚くほど発見に満ち新鮮である。

コミュニケーション活動を通じて、確かな英語力を身につけさせるためにも、辞書から溢れる多くの宝物に触れさせたいものである。

(やまおか けんじ・滋賀県立草津東高等学校教頭)

学習英英辞書を比較する



中邑光男

「英英辞書には親しみを感ぜない…。」

このように感じる英語教員は少なくないだろう。しかし英英辞書をじっくり読むと、彼らがふと「横顔」を見せ、「息づかい」を感じさせてくれる瞬間がある。

当然であろう。最近、辞書を語ることばには、コーパス、データベース、電子辞書など「機械的」なものが多い。しかし詰まるところ、辞書は執筆者、編集者の判断の集合体であり、すぐれて「人間的」な資料であるはずだからだ。

この考え方に立ち、本稿では利用者の立場から学習英英辞書を比較し、その「横顔」や「息づかい」の一端を紹介したい。

本稿で取り上げるのは、われわれが使う頻度の高い、次の英英辞書の最新版である。基本動詞である break を例に取り、「特徴」「定義」「用例」「MFS」について、それらを比較する。なお MFS は My Favorite Sentence の略。英英辞書が「素顔」を見せる用例を取り上げたい。

- *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English (OALD)* (2005)
- *Longman Dictionary of Contemporary English (LDOCE)* (2003)
- *Longman Advanced American Dictionary (LAAD)* (2000)
- *Collins Cobuild English Language Dictionary (COBUILD)* (2003)
- *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners of American English (MED)* (2002)

- *Cambridge Advanced Learner's Dictionary (CALD)* (2005)

■ OALD : 「老舗の辞書」

特徴：初版は1948年に出版された英英辞書の老舗。最新の第7巻巻頭にも初版のサンプルページを掲載しており、伝統を重んじる態度はまるで京都の老舗旅館のようだ。それだけに変化には慎重なのか、第7版は第6版にマイナーチェンジを施したものである。

定義：Oxford 3000と呼ばれる3000語の定義用語彙が担当する。LDOCE の2000語では不十分だと感じる英語教師にとっては心地よいサイズだ。

“to do sth that is against the law” のような従来型の定義に加え、COBUILD の影響を受け “when the day or dawn or a storm breaks, it begins.” のように文で定義を与える場合もある。しかし文タイプの定義の総数は控えめで、従来型定義の伝統を保持しようとする強い意志を感じさせる。

なお、意外にも、文化、特に食べ物の紹介に熱心な辞書だ。6辞書の中でこれだけが bran tub や bread-and-butter pudding を取り上げている。

用例：用例は少なく、用例平均単語数は8.6語と6辞書の中で最小である。つまり用例には無駄がなく、成熟度が高いと言えよう。COBUILD の用例 Jurassic Park had broken all box office records. に対して、The movie broke all box-office records. を示し、淡泊だ。

MFS：She longed to break in on their con-



versation but didn't want to appear rude.
用例まで上品だと思いませんか？

■ *LDOCE* : 「user-friendly な辞書」

特徴：学習者にとり便利な点は積極的に取り込む。色使いは明るく、イラストも多い。コーパス調査の結果をいち早く取り入れ、進取の気性に富む。派手でサービス精神に富む姿は「大阪的」。

Updated Edition (2005) に付属する CD-ROM は、8万8000用例の発音を収録する優れものだ。英英辞書が CD-ROM の情報や使い勝手を競う時代に本格的に突入したと思わせる。

定義：2000語の語彙を使う。*OALD* の3000語に対し、2000語だけで定義を行ったことに、この辞書の user-friendly な姿勢がよく表れている。

定義の示し方は、*OALD* のように従来タイプにこだわることなく、文タイプと従来タイプを使い分けている。ここでもフットワークは軽い。

用例：多くの例を示す。文の長さや読みやすさの点で、*OALD* にも匹敵する円熟の技を見せているのは意外。

MFS：Many British firms have failed in their attempts to break into the American market.

同じ Longman の米語辞書である *LAAD* では We think this product will help us to break into the Eastern European market. とある。がんばれイギリス企業！

■ *LAAD* : 「*LDOCE* の米語版ではない辞書」

特徴：Longman 発行の米語辞書だが、*LDOCE* とは性格を異にする辞書に仕上げている。

その象徴は地味な色づかいだ。*LDOCE* と違い、赤や青などは使わずに意味やコロケーションは黒のゴシック体で示すのみ。

定義：2000語を使う点は *LDOCE* と同じ。しかし類似点はそこまで。*LDOCE* で使われている when を if に変え、情報を付け加えるなどの細か

な芸が目立つ。「私は *LDOCE* とは違う！」と自己主張している。

- *LAAD*: if a boy's voice breaks, it gradually starts to sound lower, like a man's voice, sometimes doing this suddenly as he is speaking
- *LDOCE*: when a boy's voice breaks, it becomes lower and starts to sound like a man's voice

用例：この辞書の最大の「売り」はゴシック体で示した数多くのコロケーションだ。他の辞書が “break for lunch” しかあげていないのに、“break for lunch/coffee/dinner etc.” を示し、情報量が豊富である。

用例も *LDOCE* のものを「使い回し」せずに、別物を用意している。*LDOCE* より数を減らしながらも 1文あたりの単語数を増やし、バラエティ豊かな表現を提示している。米国の文化・風習を感じさせる英文を多く収録している点も特徴だ。

No one has yet found a way to break down the hatred between the two ethnic groups.

MFS：Sir, sorry to break in on your meeting, but your wife is outside.

アメリカ映画の一場面を見ているようです。面白いというよりも怖い…。

■ *COBUILD* : 「こだわりの、読むための辞書」

特徴：画期的だったフルセンテンスの定義法は、他の英英辞書でも採用され、新鮮さが失せた。しかし、語義の右側に記載されている詳細な語法注記は *COBUILD* だけの特徴だ。

語法情報は、主にライティングの参考になる。たとえば、「関係を断つ」の意味の break には

V with n; V from n; V n with n

の注があり、break with ～, break from ～, break ... with ～ の3用法があると即座に分かる。

定義：フルセンテンスの定義の情報量は多いが、

求める語義を探すのには苦勞する。コロケーションを知るにも1つ1つ定義を読まなければならない、時間がかかる。この辞書は読むためのものだ。用例：用例数は6辞書で最大、用例平均語数も最大である。The Bank of Englishから用例を採用したために、用例に「物語性」を感じる(A)。反面、固有名詞や省略符号付きの用例が多い(B)(C)。外国文化の知識が乏しいと、分かりにくい用例も含まれている。用例として実例を使うという「こだわり」も、ここまでくると、感心する。

- (A) Because he was being so kind and concerned, I broke down and cried ...
(B) Mrs Southern listened keenly, occasionally breaking in with pertinent questions ...
(C) The plate broke ...

MFS: He went into TV and got his first break playing opposite Sid James in the series 'Citizen James'.

海外のテレビ事情に疎い私には、この文の本当の意味が分かりません。

■ MED: 「見やすいレイアウトの赤系色の辞書」

特徴：見やすく、コンパクトなレイアウトを持つ辞書だ。基本語の意味を表にし、薄赤の色を使い目立たせている。

語の定義の後で代表的なコロケーションをまとめてゴチック体で示し、非常に見やすい。

定義：なぜか、定義には OALD と LDOCE の中間にあたる2500語を使っている。基本語の意味を見やすく一覧表にしている点がいい。しかし、残念なことに意味を羅列しているだけで、この表によって頭が整理されることは期待できない。

- 1 separate into pieces
2 fail to obey rules
3 make a hole/cut
...

句動詞は break の下位項目ではなく、見出し

語扱いしている。慣れれば問題はない。

用例：用例の数は最小で、最大数の用例を示す COBUILD の60%程度にとどまる。用例の難易度は平均的。この辞書の個性はあまり強くないが、用例についてもその印象を同じくする。

MFS: Some women broke with tradition by going to study abroad.

21世紀の日本ではこの英文はぴんときません！

■ CALD: 「意味のナビとイコール記号の辞書」

特徴：単語だけでなく句動詞にも GUIDEWORD と呼ぶ意味の標識を立て、検索性を高めている。英語の表現を他の英語で言い換えるためのイコール記号を活用しており、「英文英訳」を楽しむことができる。

定義：break そのものの意味は10しか取り上げていない。OALD の22, LDOCE の15と比べてもその少なさが分かる。ただし句動詞については、同じ形でも意味ごとに別項目としており、「見出し」の総数は慣れないと使いにくいほど多い。

break *sth* in **SHOES** *phrasal verb* [M] to wear new shoes or use new equipment for short periods to make them more comfortable: *My new hiking boots will be great once I've broken them in.*

分かりにくい英語を簡単な英語で言い換えるためのイコール記号は OALD の「売り」だったが、今では CALD の得意技になってしまった。ちなみに動詞の break だけでも20も使っている。

The enemy were unable to break the code (= understand it and so make it useless).

用例：数、読みやすさともに OALD とほぼ同じ。数は少ないが、読みやすい用例だと言える。

MFS: He's broken a lot of girls' hearts.

break one's heart の用例で heart の複数形を使ったのは CALD のみです。まじめな私たちには思いつかない用例ですね。

(なかむら みつお・関西大学教授)

コラム?

辞書の文字の話

英語辞書編集部

見出しは太くて目立つ書体。重要な訳語はゴシック。成句は太い斜体。……辞書にいろいろな種類の文字が使われていることは誰でも知っている。しかしいったい何種類の文字が使われているのか、などと考えてみる人はあまりいないだろう。辞書にはどんな種類の文字がどんなふうに使われているのかを『ジーニアス英和辞典 第3版』を材料に紹介してみよう。

まずは見出し。同じ書体を大きさ(級数[※])を変えて使い分けている。A, Bランクは16級, C, Dランクは14級。分離複合語(2語以上からなる見出し)はこの辞書では1語目の下位項目という位置づけにしているので、やや小さく13級にしてある。ほかに別綴り(11級)というのがあり、たとえばcolorの項で「color,」の後に「(英) -our」と小さい文字で出ているのがそれである。ちなみに「catalogue, (米ではしばしば) -log」では「-log」は小さくならない。両方で書き方が違うのはなぜか、理由を考えてみてください。

成句見出しは太い斜体。これも重要なもの(*つき)は級数を上げているので2種類の大きさがある。

本文の和文は一般的な明朝体だが、よく見ると仮名の横幅が少し狭くなっているのに気づくだろう。多くの字数を収録するために、漢字の3/4の幅に設計された仮名を使っているのである。重要語義や語義の大区分(I, II, III...)のタイトルなどには太いゴシック体の文字を使っている。(正式)(英)[叙述][限定]などの文字が左右に圧縮されているのがおわかりだろうか。本文とは異質の「記号」として読んでもらうための工夫である。

見出し以外の欧文はどうか。用例などの本文書体には立体と斜体がある。用例の中で定型句を表すために太い斜体を使っているが、成句見出しほど強くない書

体を選んでいる。

参照先が成句の場合、その成句が扱われている見出しを示すのに「=change PLACES.」のようにスモールキャピタル(小さめの大文字)を使っている。

発音はIPAにもっともふつうに使われるセンチュリーールドという書体。本文の欧文とは別である。

語形変化は、見出しよりは細く小さいが本文よりはだいたい太い書体を使っている。これと文型の[SV to O]のtoは同じ書体だが、後者の方が1級大きい。

文型表示や成句中に出てくるS, V, Oなども、本文とは違う書体を使い、しかも左右を圧縮している。これも文字というより記号であるから、本文と視覚的に差がつくように工夫しているのである。

語義番号は見出し用の書体を大きさを調整したうえで使っている。ただし、これが「→4.」のように参照先になる場合は級数を下げている。語義番号の意味であることを無理なく伝えるために書体は同じものを使い、ただし当該の語の語義番号と紛らわしくないようにこちらは小さくしているわけである。

成句と分離複合語の語義番号は(1), (2), (3)...としている。これらは見出しの下位要素であるから、その語義番号も見出しの語義番号1, 2, 3...より弱い印象のものにしなければならない。しかしある程度目立つ必要もあるので、数字をゴシックにしている。

厳密にいうとまだ少しあるのだが、以上が『ジーニアス英和辞典』で使われている書体のほぼ全容である。数え方が難しいが、級数違いを含めて数えろとだいたい30種類くらいを使っていることになろうか。

そして、普通の文字以外に様々な記号がある。 などの品詞記号、 などのロゴ、 の記号、品詞記号の前の——などである。カッコ類は() [] < > { } [] [] () < > の8



コラム 1

用例よもやま話

——『ジーニアス和英辞典』は阪神びいき??

英語辞書編集部

7月中旬、某テレビ局から小社の英語辞書の編集部あてに『『ジーニアス和英辞典』には阪神びいきの例文が多いようですが、どういう事情でしょうか』という問い合わせの電話があった。驚いて、どうしてそんな話が出たのかと聞いたところ、7月初めにタイガースの公式サイトの中にある掲示板に『『ジーニアス和英辞典』の「攻撃」の項に“5回裏のタイガースの攻撃は赤星の二塁打で始まった”という用例があるのを見つけた』という書き込みがあったのがきっかけになって、インターネットで話題になっているという。

あわてて「ジーニアス」&「タイガース」をキーワードにネットを検索してみたところ、なるほど数百件の該当ページがある。その多くは阪神ファンのブログで、「ぶっちぎり」の項にこんな例文があった、「猛攻」の用例がうれしい、といった「発見」の情報が飛び交っている。「昔こういう辞典があれば、俺ももうちょっと英語を勉強したのに」という発言もあった。

ジーニアス英和・和英のCD-ROM版（小社刊）で「全文検索」を行えば、阪神についての用例を検索するのは容易である。担当者があらためて調べたところ、『ジーニアス和英辞典 第2版』には、阪神またはタイガースという語を含む例文が26あり、しかも阪神が勝っている内容のものが多かった。

テレビ局からの問い合わせには、ジーニアス英和・和英の編者・執筆者は大部分が関西の方で、編集主幹の小西友七先生を筆頭にもともと阪神ファンが多い上に、『ジーニアス和英辞典 第2版』の編集作業が山場を迎えたのが2003年の夏で、苦しい作業にあたる先生方が当時の阪神の快進撃に元気を得て、例文にも登場させた、というような「事情」を説明した（この年タイガースは優勝した）。結局、2つのテレビ番組でこの件がとりあげられ、うち1回は小社にテレビカメラ

がやってきて、担当者が出演する羽目になった。

なお、念のため付け加えれば、ジャイアンツが首位を走っている用例もあるし、一方で大リーグ関係の例文も多く、ヤンキースは12回、ドジャーズは8回、イチローは11回、松井は10回登場する。ただし、野球にばかり熱心なわけではない。この辞典の用例は全体では約74,000ある中でこの数字である。

*

もう10年以上前に赤瀬川原平『新解さんの謎』という本が話題になった。これは『新明解国語辞典』の語釈や用例から、その「主人公」の人物像をあれこれ推測したものである。この場合は、個人的な語釈に重点があったし、そもそも和英辞典の場合とは事情が違うが、確かに辞典の用例には編者の個性や嗜好などがおぼろげながら表れるということはある。

しかし、辞典の用例というのは言葉の使い方の例を示すものであり、その内容がすなわち編者の見解であるというわけではないのは当然のことである。

また、用例の内容がすべて事実だと編者が主張しているわけではない。極端に言えば、用例の内容がまったくの嘘でも、その語の用法を正しく伝えていれば用例の使命を果たしているといえる。

とはいうものの、実際にはもちろん、なるべく事実と合致した内容になる方向で検討が行われる。以前、『ジーニアス英和辞典』で、ruleの項の用例に「バレーボールではボールを蹴るのは反則だ」という意味の文があったのだが、その後バレーボールの競技規則が変わり、ボールを蹴ってもいいことになって、この用例は事実と合わなくなった。このままでもruleという語の用法を示すのに差し支えはないはずだが、重版のときに「以前は……反則だった」という内容に変更した。(1)



〈連載〉

「積ん読」の本棚から【4】(最終回)

こんな本どうですか？

山本良一

私がこのコーナーを担当してこれが4回目がかつ最終回となる。今回は英語に関する本を2冊取り上げる。

◎『アメリカの小学校教科書で英語を学ぶ』（小坂貴志＋小坂洋子 著、ベレ出版、2005.7）

本書の著者はアメリカで学び、働き、子育てをした夫婦である。息子さんの哲平君が通った小学校の様子、チャータースクールで教鞭を執った洋子氏の経験など、生きた情報を交えながらアメリカの小学校や教科書の内容を紹介してくれる本である。

序章ではアメリカの小学校について概観する。制度、教科、年間行事、日課などを取り上げている。日課に関してちょっと驚いたのは、10:30からの10分休みにめいめいのスナックを食べることと、昼食の後にも各自「本日のスナック」を食べることである。

続くPart 1からPart 5にかけて、教科ごと（社会、理科、算数、国語、その他）に教科書や授業風景を紹介する。各トピックとも、まず実際の教科書などが示される。中には問題が付されているものもあり、考えながら読めるようになっている。次に日本語で同じ内容が記されるが、これは各トピック冒頭のキーワード、付録CDと相俟って英語学習の一助となる。

社会では、紹介されている教材のほとんどが3年生から5年生（最上学年）のものだが、1年生の教材が2つある。Pledge of AllegianceとNational Anthemである。3年生の学習内容の「ネイティブアメリカンのコスチュームを作ろう」と「歴史小説プロジェクト」は興味深い。前者にはベストや羽根飾りの作り方が、後者には読んだ歴史小説のポスターかジオ

ラマを作る課題が示されている。5年生の「マヤ文明」では、教室での教師と生徒のやりとりを載せている。教師の一方的な講義ではなく、生徒の考えを引き出しながら進めるのが印象的である。マヤ文明が減んだ理由を生徒に問うと、「宇宙人による誘拐」や「ガン」のような珍答も出るが、教師がうまくさばいている。英語教師としてoral introductionの参考になる。

理科も大半が3年生から5年生の教材である。中でも、人体のセクションは、語句を埋めながら読む／聞くことができ非常に面白かった。分泌液はjuiceとも言えることなど勉強になった。再生可能エネルギーのセクションの最後に「段落の第1文にトピックセンテンスが多い」という文章構成に関する指摘があるが、これは英語の読解・作文に役立つものである。

算数では、九九の歌に感激し、歌ってみたが、少々歌いづらかった。図形の名前や表現なども役に立つ。

あとは、紙面の都合で取り上げないが、ひとつだけ。給食のメニューが載っているが、さすがアメリカ。肉中心の食事が多いなあと改めて感じた次第である。

本書は米国学校事情の名著『アメリカ小・中・高校教育マニュアル』（花田・股野共著、日本経済新聞社、1993.5）にも比肩できる書である。内容的にバランスがよく、実体験も交えてある。そして何と言っても明快で構成のしっかりした英文が最大の魅力である。

◎『英語ライティングルールブック』（デイヴィッド・セイン 著、DHC、2004.4）

前掲の本に見られるような明快な文章を書くのは、non-nativeの我々には無理としても、少しでも近づ

きたい。そんな人にもってこいの本が本書である。

序章、文法、語法、句読法、アメリカ英語とイギリス英語、資料という構成で、全体を通して、目的に合った正しい文章を書くことを目指している。

序章の中で印象的だったのは、ネイティブチェックが不可能な場合のチェック法である。「とりあえず(中略)2パターンを作っておいて、何時間かたつたあと、あるいは翌日にそれらの文章を冷静に眺めてみるのである」。これは早速実行したい。

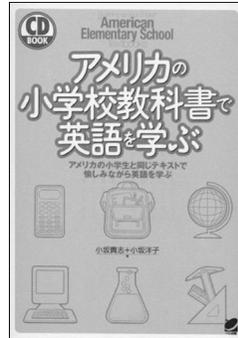
文法編にも参考になることが多い。不定詞と動名詞、法助動詞、未来表現、現在形と現在進行形など、従来の学校で間違っただけで教えられてきたことを正確に説明している。たとえば、will と be going to が異なることを示す例として、電話に出るときに I'll answer it. は言えるが、I'm going to answer it. は電話が鳴ることがわかっているような感じで不自然だとする。

語法の説明もわかりやすい。たとえば、過去になしたことを could で表現する生徒が多いが、著者は I was able to finish on time. はいいが、I could finish on time. とすると、「私ならできるのに」という仮定法の意味になると言う。should と need to と had better の使い分けなども納得がいく。

語法の中には差別的表現と PC 表現もあり、不適切な表現と適切な表現のリストが挙がっている。mailman は mail carrier, fisherman は angler など。その他、手紙などのフォーマルな表現とカジュアルな表現もまわっていてわかりやすい。

本書の一大特徴は、句読法にページ数を一番多く割いている点である。ライティングのテキストには必ず punctuation が載っているが、見開き2ページくらいの軽い扱いである。が、本書では80ページ近くを割き、諸記号、イタリック、大文字、インデントなど、誤用法と正用法の例を出して丁寧に説明してくれる。記号に関しては、前後のスペースの数に言及するなど、かゆいところに手が届く配慮である。私自身、20年近く前に担当した英文タイプの授業で、「ピリオドのあとは2スペースだ」と教えたが、今は1スペースでもよいと知った。

英米の英語の相違もわかりやすい。文法の例を挙げると、米では It's gotten so cold と gotten を用



アメリカの小学校教科書で英語を学ぶ

—アメリカの小学生と同じテキストで楽しみながら英語を学ぶ
小坂真志/小坂洋子 著
2005. 7, ベレ出版
本体価格 1,800円

英語ライティングルールブック

—正しく伝えるための文法・語法・句読法
デイヴィッド・セイン 著
2004. 4, DHC
本体価格 1,600円



いるが、英では got を使う。また、英で He has just gone out. と現在完了を使うが、米では He just went out. と過去形で表す。これまで何冊もの本で知ったことが1箇所にとまどっていてありがたい。他にもつづりや語彙など、豊富な例は辞書としても使える。

優れた本書にも、物足りない部分がある。たとえば、受動態が使われるのは「動作主が一般の人々である場合、動作主が自明である場合、…」と分類しているが、文脈の中で態を選択する視点がない。例もすべて単文である。時制の一致も文脈が設定されておらず、また現時点からの時制の選択という視点もない。Joe said, “I saw John ... last night.” を Joe said he had seen John ... the night before. と書きかえるだけ。この文が Joe の発言と同じ日のうちにされたものなら、Joe said he had seen (saw) John ... last night. と言うはずだ。とは言うものの、全体を通して優れた参考書であることに変わりはない。

おわりに

本連載のおかげで、積ん読の本棚の本もかなり日の目を見た。今後、再び積ん読が始まるか、それともこれを機に脱出できるか、いま私は分岐点に立っている。

最後に、読者諸氏、特に感想などをお寄せいただいた方々にこの場を借りてお礼申し上げます。またどこかでお会いしましょう。

(やまもと りょういち・筑波大学附属高等学校教諭)

はじめてのアクション・リサーチ ——英語の授業を改善するために

佐野正之 編著

山岡俊比古
(兵庫教育大学教授)



アクション・リサーチ (以下、AR と略す) とは、授業において見いだされた問題点について、その実態の把握と原因の究明に努め、それに対する対策を考案してこれを実施し、その結果を検証してさらなる改善をめざす活動である。

理論からではなく、現場の問題意識から出発するこの研究法は、授業改善を常に心掛け、何とかよりよい授業を展開したいと思っているが、多事多端に迫われ、改まって理論を勉強する暇がなく、悶々としている教師にとって1つの突破口となるものである。

本書と同じ著者による『アクション・リサーチのすすめ』(大修館書店)は、この意味における授業改善の突破口を教師に提供する貴重な提言となった。多忙ではあるが意欲ある教師のいかに多くが、AR に目覚め、それに着手したかを想像するに難くない。

『アクション・リサーチのすすめ』がこの研究法の歴史や定義、他の研究法との比較、研究手法の概説を行い、読者をこの研究法へといざなう目的で書かれたのに対し、本書はさらに踏み込み、AR の実践を実現するための要点を具体的に説明する意図をもって書かれている。

本書のその意図は、「まえがき」に述べられている以下の課題に答えることにある。

「忙しい先生方のために、実践に必要な情報に焦点化できないか。一番苦勞する『仮説の設定』に役立つ英語教育の知識を組み込めないか。研修で実際に書かれたレポートを示せないか。さらに、先進的な研修プログラムを紹介できないか。」

この意図を受け、本書は以下の3部構成となっている。第1部：授業改善のためのAR、第2部：テーマ

別ARの進め方、第3部：教員研修とAR。

第1部は、ARの基本と研究の進め方のQ&Aを扱い、第2部は研究テーマとして、基礎的な英語力、4技能、学習意欲、少人数指導、小学校英語活動を挙げて研究の具体例を示し、第3部は高知県、神奈川県、広島県三次市、アクション・リサーチの会@近畿のそれぞれの教員研修での事例を紹介している。

本書は、授業改善を目指し、ARを「はじめて」行おうとする教師が確実にそれに着手できるように手だてを講じたものであり、可能性としての授業改善の突破口を、まさに本当の突破口とするためのものである。この意味において本書はきわめて貴重であり、意欲ある教師にとっての必読書となる。

文法項目別 英語のタスク活動とタスク ——34の実践と評価

高島英幸 編著

吉田健三
(兵庫県立神戸高等学校教諭)



教室内の英語教育を通して「実践的コミュニケーション能力」をどのように育成することができるのか。現場の教師が常日頃直面している課題に対し、本書は、具体的な実践例を提示した意欲作である。

そのモデルの根底には、Larsen-Freeman(2003)が提唱するように、文法を知識ではなくスキルとしてとらえ、「form(言語形式)、meaning(意味)、use(言語使用)」という3つの側面を相互に関連させ、同時に指導する必要がある」(p.14)という考え方がある。

現実の教室では多くの場合、言語形式とその意味を教える宣言的知識(declarative knowledge)の指導段階で留まっているのではないだろうか。具体的な場面に応じた言語形式を即座に選択するには、宣言的知識を手続き的知識(procedural knowledge)に発達させることが必要だといわれている。

本書は、そのような第二言語習得理論研究の成果を踏まえ、focus on forms(伝統的文法指導)の問題

点を解決するため、focus on form（言語形式にも焦点をあてた言語指導）の重要性を唱え、構造シラバスに基づいた検定教科書の使用を前提としている。

その言語活動の種類については、ESL と EFL の言語環境を区別した上で、Task-Based Language Teaching (TBLT) よりも Task-Supported Language Teaching (TSLT) の方が日本の教室での英語教育にはより現実的であるという考えに基づき、TSLT における「コミュニケーション活動」を次のように分類している。(1)タスク(Task), (2)タスク活動 (Task Activity: TA), (3)タスクを志向した活動 (Task-Oriented Activity: TOA)。これは、主に中学生対象の TA が取り上げられていた前著『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』（高島：2000）からの発展的な内容である。小学校での TOA, 高等学校での Task（特に Focused Task）を TA に加え、「小学校から高等学校へと一貫性を有する英語教育の『縦』の連携を構想する視点」（p. 215）が盛り込まれているのも本書の大きな特徴である。

高等学校では、英語 I や II の授業で explicit な文法説明を行ったのち、OC の授業で、TA や Task といった implicit なコミュニケーション活動を通して言語運用能力の育成を図ることが考えられる。本書の実践例を教室で試み、そこでぶち当たった問題点を分析し、個々の教室に適した言語活動を創造すれば、それぞれの教育現場の大きな財産となるに違いない。

者のリン・トラスは、『サンデー・タイムズ』の専任書評者であり、BBC ラジオ第 4 放送の常連出演者でもある。

同書は、2002年に放送され、好評を博した人気番組『カッコ付け』がベースになっている。句読法の重要性を浮き彫りにするために、タイトルは「ものを食べて、銃を撃って立ち去る」パンダのジョークを使っている。（カフェでサンドイッチを食べていたパンダがいきなり拳銃を取り出し、天井に向けて 2 発撃ち、そのまま出口へ向かう。それを見たウェイターが「どういことですか」と訊くと、「俺はパンダだ」と言い、野生動物解説書を投げつけ、「読んでみな」と言う。ウェイターはそこに“Panda. Large black-and-white bear-like mammal, native to China. Eats, shoots and leaves.”と書かれているのを読んで納得するというプロットである。Eats の後のコンマの有無がコンテキストを変えるということを示唆したものである。[コンマあり→「食べ、撃ち、立ち去る」、コンマなし→「芽や葉っぱを食べる」の意]

内容は「序章—第七感」「アポストロフィは御しやすい」「それで十分だよ、コンマ君」「お上品ぶり」「格好を付けて」「ハイフン—あまり使われない句読記号」「ただの決まりきった印」という構成である。

女史の語り口は毒舌であるが、現在のイギリスの句読法の誤用を“クリティーク”するだけではなく、古代ギリシャで誕生した句読法の歴史の変遷についても言及している。同時に、Eメール、インターネット、ケイタイなどが現在の句読法の「乱れ」の要因であると指摘しながらも「書き手」の増加とそれに伴う文字文化の波及を温かく見守っている。

句読法は、ある程度英文が読めるようになった高校生でも、“軽視”する傾向がある。たとえば its と it's の区別など、頭で分かっている、誤文訂正や作文では見落としがちである。また、読解では、コロンやダッシュがあれば未知語を予測し、文脈を類推することができるにもかかわらず、辞書に「頼りすぎて」いつまでたっても「自立した読み」ができない生徒も多い。語学は「楽しく学ぶ」のが基本である。その意味でリフレッシュできる 1 冊であることに間違いない。一読をお奨めする。

パンクなパンダの パンクチュエーション ——無敵の英語句読法ガイド

リン・トラス 著 今井邦彦 訳

平井正朗

(京都文教中等学校教諭)



今、イギリスやアメリカで愛読者が急増し、話題になっている本がある。題名は『パンクなパンダのパンクチュエーション——無敵の英語句読法ガイド』。著

大修館書店の本

Books from Taishukan

◆日本語との比較で学ぶ英語の発音

〈日本人のための〉英語音声学レッスン

牧野武彦=著

(A 5判・178ページ・CD付・定価2,415円)

◆自立的な英語学習を行うためのワークブック

〈英語学習のための〉情報リテラシーブック

西納春雄=著

(B 5判・120ページ・定価1,365円)

◆フォーマルなスピーチとその通訳の実践教本

実践 英語スピーチ通訳

ピンカートン嘩子・篠田顕子=著

(A 5判・208ページ・CD付・定価2,415円)

◆敬語論の歴史を一つの思想史として包括的に捉え直す

日本の敬語論

滝浦真人=著

(四六判・330ページ・定価2,100円)

(定価=本体価格+税5%)



ご投稿大募集中



『G.C.D.英語通信』は、先生方と小社英語教科書編集部との意見・情報交換の広場です。小社教科書についてのご質問、お使いいただいたご感想などを小誌編集部宛にお寄せください。「GCD教科書 Question Box」で随時ご回答・ご紹介してまいります。

また、英語や授業に関わるさまざまなご投稿、特に下記のテーマに関するものなどをお待ちしております。

- ・授業レポート…特色ある授業の実践記録
- ・授業実践シリーズ…小社教科書を使った授業の紹介
- ・英語教師のひろば…英語教育全般

ご投稿は、郵便でお送りください。採用分につきましては、発行後、薄謝をお送りいたします。なお、採用・不採用にかかわらず、原稿はお返しいたしません。また、採否のお問い合わせには応じかねます。あらかじめご了承ください。

◆営業便り◆

▶平成18年度の教科書の注文書が全国から多数到着しました。ご採択いただいた先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。各教科書には、準拠の『ワークブック』を発行しております。お問い合わせは、小社販売部もしくは最寄りの小社営業所までご連絡ください。

▶昨年12月に発行した『問題な日本語』が、70万部を超えるベストセラーになりました。言葉の使い方に対して、社会の関心がきわめて高いことを、改めて感じました。

また、このたび、TBS系列で放映の「クイズ!日本語王」とタイアップし、ドリル形式の『クイズ!日本語王』を発行しました。さらに、『問題な日本語』の第二弾として、『続弾!問題な日本語』も10月末刊行となります。

▶『問題な日本語』は、高等学校の先生方とのインタラクティブから、誕生しました。弊社は今後も、先生方・読者の皆様とともに、「言葉」を見つめつづける出版社でありたいと願っております。小社出版物へのご指摘・ご意見がございましたら、編集部または営業担当者まで、お寄せいただければ幸いに存じます。

◆編集後記◆

▶「辞書指導の必要性は重々承知しているが、授業の中で辞書の使い方を詳しく説明する時間をなかなか取れない」。これは多くの先生が抱えていらっしゃる悩みだと思えます。今回の特集では、様々なお考えで辞書指導を行っていらっしゃる先生方に日頃の実践例をご紹介いただきました。

▶高校入学時まで、あまり英語の辞書にふれてこなかった生徒さん達に、どのようにして辞書に親しんでもらうか。そしてその先には、辞書にぎっしりつまっている情報をいかにして使いこなせるようになってもらうか。このようなことを目指して、どんな機会に何を重視して指導されているのかという具体的な事例が、これからの辞書指導を語り合うきっかけになるよう願っています。

▶いっぽう私も辞書編集部では、内容の充実は当然のことながら、高校生が使う際につまずきやすいのはどういう点かということに留意し、学習者がアクセスしやすい情報提示の方法を十分に研究していくことも重要な課題であると考えています。小社辞書をご利用いただいてのご意見・ご感想をぜひお寄せください。(湯)

Genius・Captain・Departure

英語通信

第38号

2005年11月1日発行

(年2回発行)

【出版情報】<http://www.taishukan.co.jp>

編集人 ©「G.C.D. 英語通信」編集部

発行人 鈴木一行

発行所 株式会社 大修館書店

101-8466 東京都千代田区神田錦町3-24

Tel. (03)3294-2355(編集部) / (03)3295-6231(販売部)

振替 00190-7-40504 印刷・製本 文唱堂印刷株式会社